

## 学位（博士）論文要旨

看護学専攻 基礎看護学教育研究領域（理論看護学）	学籍番号 0933002 氏名 吹上 大祐
論文題目	看護実践の自己評価の過程的構造
<p>Keywords : 看護実践、判断根拠、自己評価、理論の適用、自己評価指標</p> <p>本研究の目的は、看護は理論を適用しつつ実践し自己評価しながらそのレベルを向上させていく専門職であると教育された自己の卒後7年間の総括し、その過程的構造を明らかにして成長過程を促す自己評価のあり方について示唆を得ることである。研究対象は、看護できた実感したが、その判断根拠を表現できなかった卒後7年間の看護実践における看護者（自己）の認識とした。研究方法は、まず、研究対象とした看護実践をプロセスレコードに再構成し、その時「どのような事実が浮かんで来たか」を想起して追記し、看護実践の論理を抽出して研究素材とした（15事例18場面）。研究素材のうち、看護者と対象の目標像の重なりを共有できた事例が、看護理論の修得レベルがこれまでで最も高いレベルに達したと判断し、その看護実践の自己評価から、自己評価の分析指標（5項目）を抽出して、作業仮説とした。次に、各研究素材を分析して自己評価の特徴を取り出し、これを分析指標に照らして、共通性と相異性を検討し、経年的変化の特徴を取り出した。これより、看護専門職者としての成長過程を吟味した結果、以下の看護実践の自己評価の過程的構造8過程が明らかとなった。</p> <p><b>【看護実践の自己評価の過程的構造】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li><b>1 対象の事実から対象特性を捉えていく過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 対象の事実の意味を、発達段階、健康障害の種類、健康の段階、生活過程の特徴の視点で捉えている</li> </ol> </li> <li><b>2 対象の事実から対象の看護の必要性を捉えていく過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 看護の評価を行えない時には、どのように看護の必要性を捉えていたかを振り返っている</li> <li>2) 常に、対象の事実生命力の消耗はないか問いかけながら、生命力の特徴を捉えている</li> <li>3) 対象の事実やニーズのその人にとっての意味を捉えている</li> <li>4) 対象への目的意識的な取り組みを通して看護者自身の人間観が培われている</li> </ol> </li> <li><b>3 対象への立場の変換を重ねていく過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 自己の看護実践を看護にするために、対象への立場の変換ができない時には、認識を形成してきた生活過程や、対象に意識的に問いかけている</li> </ol> </li> <li><b>4 対象の看護の必要性に即して関わられるように看護者の人間観を重ねていく過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 対象の看護の必要性に即して関わられるよう、対象を生きかつ生活している人間としてみつめている</li> <li>2) 対象の持つ力に感動したことや人間の力のすごさを感じたこと、自己の人間観を看護スタッフ間で共有している</li> </ol> </li> <li><b>5 対象の看護の必要性に即した看護者の経験を想起して、表現に活かしていく過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 対象の事実から、直接看護上の問題として捉えられないときには、一旦、自己の経験や人間観とつぎ合わせてその意味を捉えている</li> <li>2) 対象の認識に関心を寄せ、対象に表現しようとしていることの意味を捉えている</li> </ol> </li> <li><b>6 対象の事実から捉えた意味をつなげていく過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 対象の事実の意味をつなげて捉えられず失敗した場面を自己評価し、次の実践に役立てようとしている</li> </ol> </li> <li><b>7 看護者として放っておけない感情が湧き起こる過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 自己の判断過程とその根拠のつながりを捉えることで、対象への看護者として放っておけない感情が湧き起こっている</li> </ol> </li> <li><b>8 対象と夢を共有する過程</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 看護者の表現に、目標像に向かって対象とともに歩む姿勢が表れている</li> </ol> </li> </ol> <p>さらに、以上の8過程の共通構造として次の過程が明らかとなった。</p> <p><b>&lt;看護者が自己の判断過程を客観視しながら成長していく過程&gt;</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 自己の判断が自分流ではなく、相手の立場から考えられている</li> <li>2) 判断過程のつながりを意識できている</li> </ol> <p>以上より、看護者が一貫して把持していた判断根拠や看護専門職者の成長過程を促す自己評価のあり方について考察したところ、看護実践の自己評価の過程的構造を促す自己評価指標（大項目1中項目8小項目15）が導き出された。この指標に照らして、看護者が自己の判断過程を客観視しながら看護理論の修得段階を高め、培われてきた人間観との相互浸透を含めて評価していくことを通して成長が促されると示唆を得た。</p>	

指導教員氏名（自署）：

新田 なつ子

平成 24 年 3 月 13 日

宮崎県立看護大学大学院  
研究科長 山岸 仁美 様

学位論文 (博士) 審査委員

主査 氏名 (自署) 新田 なつ子

副査 氏名 (自署) 大名門 裕子

副査 氏名 (自署) 浅野 昌亮

副査 氏名 (自署) 薄井 坦子

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文 (博士) の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名 吹上 大祐		学籍番号 0933002	
看護学専攻 基礎看護学教育研究領域 (理論看護学)		指導教授氏名 新田なつ子	
成績 評価	学位 論文	合格	最終 試験
論文 題目	看護実践の自己評価の過程的構造		
審査 要 旨	<p>予備審査では、看護理論を学んだ看護者が、自己の看護実践の判断過程を分析し、その看護実践の判断根拠から自己評価指標を導き出し、これを作業仮説として用い、卒後 7 年間の判断過程の変化発展の構造を縦断的に明らかにしたことが評価されたが、表現を吟味するよう助言された。</p> <p>本論文審査では、作業仮説とした自己評価の分析指標に照らしながら、対象事例における判断根拠の特徴は明らかになったものの、作業仮説を取り出したプロセスをより詳細に示すよう助言された。そこで、その作業仮説の抽出過程を詳しく論述し、分析指標の妥当性を確認し直した上で、経年変化の連関がより明確になるよう取り出した結果、卒後からの自己評価の発展過程を明らかにすることができた。さらに、その発展過程に共通していた原理について論述を加えること、研究動機と考察の一貫性を吟味し、考察を深めて理論を再措定しながら成長していくための自己評価指標を導き出し、その有用性を論述するよう助言された。そこで、発展過程の共通構造を可視化し、それに照らして重層的な経年変化の構造を表現し直した。そのことにより、看護理論の修得過程と適用過程の連関が確認された。また、考察を深め、看護実践の成長を促すために念頭におくべき自己評価指標が導きだされた。</p> <p>看護理論を実践に適用し自己評価しながら看護していくことを学んだ看護者が、理論をどのように再措定しながら成長していくのか、その適用過程を事実的に明らかにしたことは、理論看護学上価値ある研究として認められた。</p>		